

研究紀要

Bulletin

of

Niigata City Art Museum &
Niitsu Art Museum

長島 彩音 三浦文治《昭和天皇巡幸記》素描について
..... p.3

第9号 (令和4年度)

No.9 (2022)



Niigata City Art Museum



NIITSU ART MUSEUM

新潟市美術館・新潟市新津美術館 研究紀要 第9号

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要
第9号（令和4年度）

Bulletin of Niigata City Art Museum
&
Niitsu Art Museum
No.9 (2022)

三浦文治《昭和天皇巡幸記》素描について

長島 彩音

はじめに

《昭和天皇巡幸記》素描は、日本画家、三浦文治（一九〇六～一九九四）が、昭和二十二年（一九四七）の昭和天皇による甲信越巡幸の内、新潟県および長野県の行程に取材した全三十八葉からなる。平成二十七年（二〇一六年三月）、遺族より新潟市新津美術館に寄贈〔註1〕された。本稿では全葉の図版を掲載し、解題を添える。

三浦文治は、明治三十九年（一九〇六）五月八日、新潟県北蒲原郡水原町（現・阿賀野市）に生まれた。大正十五年（一九二六）、東京美術学校日本画科に入学。同級に田中孝（一村、一年次に中退）、加藤栄三、橋本明治、東山新吉（魁夷）、山田申吾がいた。特に松岡映丘教授の薫陶を受け、昭和三年（一九二八）と昭和五年の二度にわたって特待生となっている。昭和四年、在学中ながら第十回帝国美術院美術展覧会（帝展）で《ブルー図》が初入選、早くも画壇にデビューした。昭和六年に卒業、引き続き松岡映丘、川崎小虎に師事し、同年より三度の帝展連続入選を果たしている。昭和十一年（一九三六）の第十一回オリンピック大会芸術競技（ベルリン大会）では、日本出品八十四点（うち絵画六十三点）の一つに選出された。

昭和二十年（一九四五）、郷里に疎開。以降は新潟県に留まり、戦後も中央画壇から距離を取った。公立高等学校で美術教諭として勤務。新潟県立新潟高等学校の校章は、三浦がデザインしたものである。新潟県高等学

校教職員組合の委員長（昭和三十五～三十九年）も務めた。教職の傍ら、県内の文化振興および後進の育成に尽力。新潟県美術展覧会（県展）、新潟県芸術美術展（芸展）等で活動した。県外では三浦の名はあまり知られていないかもしれないが、細密な群像や点景人物を配する風景画・風俗画に充実した画境を示した。その作品は新潟市新津美術館、新潟市美術館、東京藝術大学大学美術館、新潟県立近代美術館・万代島美術館、公益財団法人知足美術館、白山神社（新潟市中央区）等に所蔵されている。

制作の背景

昭和天皇の戦後巡幸は、昭和二十一年（一九四六）から昭和二十九年（一九五四）にかけて行われた。総距離は三万三〇〇〇km、延べ日数一六五日間に及ぶ。新潟県行幸は昭和二十二年（一九四七）十月八日から同月十二日までの五日間の日程だった。下越、中越、上越を回って県民に迎えられる、官民の施設を訪問した。三浦の素描集には行幸の様子や県民の表情が豊かに描かれており、折々の日付やメモを添えた絵画史料ともなっている。

制作の経緯ははっきりしていない。新潟県行幸と同じ時期に、新潟鉄道局（当時）から発行された印刷物「鳥瞰図（新潟長野編）」（昭和二十二年十月発行、新潟市新津美術館蔵）〔挿図1、2、4〕があり、その原画を三浦が描いたことが裏表紙の署名から分かる。これに先んじて発行された「山形秋田編」の鳥瞰図（昭和二十二年八月発行、新潟市新津美術館蔵）

当館での受け入れ当初、三十八点の素描は画帖に仕立てられていた。本稿のための聴き取りによれば、素描を画帖に貼り付けたのは三浦の長男、文吉で、三浦の没後のことであるという。受贈手続きの際、当時の当館職員と遺族の協議によって《昭和天皇巡幸記》と仮題された。受贈後、当館の判断で各葉が台紙から剥がされ、裏打ちが施された。裏打ちの和紙を透かして見ると、一部の素描には裏面にも絵や文字があることが分かる。しかし、裏打ち前の裏面の記録画像を確認できないため、本稿ではその記述を割愛した。当初の画帖の表紙は残っていない。

素描には、鉛筆のみで描いたものと鉛筆と水彩を併用したものがある。三浦の長女、板垣桃子によると、彩色を施したのは、三浦が晩年に神奈川県葉山町に移住したのちの昭和六十年（一九八五）頃のことだという。また、三十八点の用紙の寸法はまちまちで不揃いである。縦ないし横の寸法が揃っている素描も何点があるが、二辺が平行・垂直でないものも多い。

作品の概要

取材の目的としては、新聞・雑誌記事の挿画、行幸記念の本画制作などが考えられる。ただし、この頃の新聞記事では、昭和天皇の巡幸は専ら写真によって伝えられていた。新潟県への行幸前後一週間の新潟日報、朝日新聞（全国版、新潟版）、讀賣新聞（全国版、新潟版）を調査しても三浦の挿画はなく、本画の存在も現在のところ確認されていない。

「山形秋田編」の鳥瞰図表紙裏面には「東北御巡幸 先行列車乗車許可證」〔挿図3〕が貼付されている。先行列車とは、御召列車に先行した臨時列車を指す。「甲信越御巡幸」の乗車許可証は見当たらず、三浦が使用したのもと思われる。その取材には何らかの公的な依頼があったと考えられ、鳥瞰図との関連から、新潟鉄道局の関与も推測される。

にも、同じく三浦の署名がある。これらの鳥瞰図は、素描集とともに遺族から寄贈されたが、原画の現存は確認できない。



右〔挿図1〕三浦文治画『鳥瞰図（新潟長野編）』表紙、新潟鉄道局、昭和22年、新潟市新津美術館蔵
 中〔挿図2〕同・裏表紙、左下に「文治作」
 左〔挿図3〕『東北御巡幸 先行列車乗車許可證』新潟鉄道局、昭和22年、新潟市新津美術館蔵

三浦本人が既製品の紙を切って用いたと考えられる。

凡例

- ・いつ・どこで描かれたか不明のものもあるが、ここでは日時と場所の特定、行程順の配列を試みた。
- ・日時と場所が不明のものは末尾に掲載した。
- ・書き込み、寸法（縦×横cm）、材質・技法、裏面の有無の順に記載した。
- ・受贈時に画帖各面を撮影した写真が残っており、これに従って当初貼られていた順に「画帖第〇図」と記した。
- ・各素描について解題を付し、本稿末尾には全葉についての考察を記した。
- ・昭和天皇の巡幸記録については、特に注記しない場合は全て新潟県編『昭和二十二年新潟県行幸記念誌』（昭和二十四年、新潟県立図書館蔵）を参照し、訪問先の施設名なども原則これに倣った。

〔註1〕新潟市新津美術館企画展「新津美術館所蔵品展」（平成二十八年十一月二十六日～十二月二十五日、新津美術館展示室2で開催）にて全葉を初公開した。



〔挿図4〕前掲『鳥瞰図（新潟長野編）』本紙



【素描1】左下に「白山グランド／市民奉迎場へ」18.1×26.5 cm 鉛筆、水彩、紙 裏面あり (画帖第3図)



【素描2】右下に「十月八日／奉迎会場一般入口」、左下に「①」、右下に「②」18.1×26.5 cm 鉛筆、水彩、紙 (画帖第4図)



【素描3】左下に「十月八日(白山グランド)／奉迎の／高齢者」26.5×36.5 cm 鉛筆、紙 裏面あり (画帖第2図)

【素描1】「白山グランド／市民奉迎場へ」

新潟県行幸初日の昭和二十二年(一九四七)十月八日、新潟市総合グラウンド(現・新潟市陸上競技場、新潟市中央区白山公園内)に新潟市民奉迎場が設けられた。本図には、そこに向かう市民らが描かれている。日時の明らかな最初の素描は、天皇ではなく、市民を描いたものだった。

新潟県が組織した行幸関係事務委員会は、事前に一般市民に向けて「奉送上の注意」〔註2〕として出迎えの要領を示していた。これを踏まえた「陛下お迎えの心得」〔註3〕とする記事や、村田三郎新潟市長名での「市民奉迎について」〔註4〕という要項が新潟日報に掲載されている。これらの記事によると、一般の入場受付は午後三時から午後四時と定められていた。三浦はこの時間に市民を取材していたものと思われる。

杖を突く複数の高齢者と、支えながら歩く若い人たち。「平服でも作業服でもいい」「平常服で差支えありません」と事前の案内〔註5〕がされていた中、彼らは背広を着て帽子を被り、あるいは色無地のような着物に羽織姿で描かれている。天皇の奉迎に臨む人々の心構えも見て取れるようである。

〔註2〕「奉送上の注意」、前掲『昭和二十二年新潟県行幸記念誌』19頁

〔註3〕「陛下お迎えの心得」『新潟日報』昭和二十二年十月六日、第2面

〔註4〕「市民奉迎について」『新潟日報』昭和二十二年十月八日、第2面

〔註5〕前掲「陛下お迎えの心得」「市民奉迎について」

【素描2】「十月八日／奉迎会場一般入口／①／②」

前葉と同じく行幸初日、新潟市民奉迎場入口が描かれている。この素描にも天皇は登場しない。画面右には軍用車が停まっている。テント内にギャリソンキャップ(駐屯兵の舟形帽)を被った人物が描かれていることから、米軍車輛と思われる。市民はテントの横から入場している。前葉と同じ時間帯、午後三時から午後四時と推定できる。

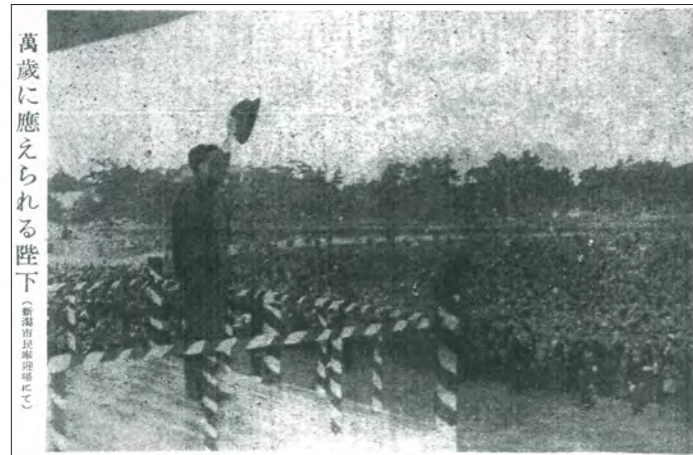
画面左下と右下には「①」と「②」とある。本図以外でこのような番号が記されたものはなく、何のためかは不明である。

【素描3】「十月八日(白山グランド)／奉迎の／高齢者」

同じく行幸初日、新潟市民奉迎場で天皇の到着を待つ高齢者らが、至近距離から描かれている。天皇が姿を現す午後四時五十五分までの間、市民は約一〜二時間待機していた。本図の人々の柔らかな表情からは期待感も感じられる。先に掲げた「陛下お迎えの心得」〔註6〕によれば、奉迎場には、「傷痍者、引揚者、遺家族、未復員家族、高齢者」のための席が用意されていた。

なお、午後四時二十分に新潟駅に着いた天皇は、新潟市民奉迎場の前にまず県庁を訪問している。午後四時三十分から同五十分にかけて滞在し、県特産物の陳列を見て、屋上から市内を展望した。

〔註6〕前掲「陛下お迎えの心得」



【挿図5】「黄昏の信江河畔に巻起る万歳の歓呼」
『新潟日報』昭和22年10月9日、第1面

天皇が帽子を挙げた写真〔挿図5〕は翌日の新潟日報に掲載されている。その撮影者は、天皇の右後方、同じ位の高さにあった。一方、三浦は本図で天皇の左横、少し離れたスタンド下からその姿を見上げている。天皇左手側には群衆が見え、三浦もその中にいた。

【素描4】「昭和廿二年十月八日／白山公園、市民奉迎場にて 御挨拶。」
同じく行幸初日、新潟市民奉迎場に集まった約三万人の市民の歓呼に応える天皇の姿が描かれている。天皇は午後四時五十五分にこの奉迎場に着き、戦災者、引揚者、遺家族、未復員家族、傷病者らに声をかけてから壇上に立った。午後五時には同所を出発し、宿泊先の知事公舎（新潟市中央区営所通、当時の建物は新発田市に移築）に向かった。奉迎場にいたのは約五分間だった。



【素描4】右端に「昭和廿二年十月八日／白山公園、市民奉迎場にて 御挨拶。」
32.0×23.0 cm 鉛筆、水彩、紙 裏面あり (画帖第5図)

【素描5】「侍従の衿／橋本学長／ワイシャツ／細い縞アリ。」
行幸二日目の十月九日午前八時五分、天皇は新潟医科大学（現・新潟大学医学部）を訪問した。本図には、複数の視点から見た人物像が組み合わされている。右上に描かれている橋本^{たかし}学長が、大学の沿革と現状について奏上した。全葉を通じて、本図では天皇の表情が最も近距離から描かれている。また、ワイシャツの柄まで描き留め、侍従の襟元のみを描く等、細部まで記録している。

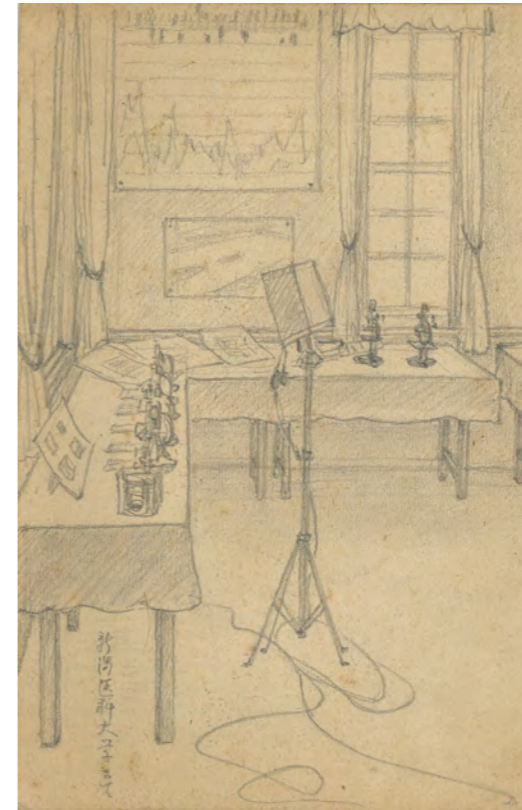
【素描6】「十月九日／新潟医大尔て」
行幸二日目、新潟医科大学での天皇が描かれている。天皇の姿以外には何も描かれておらず、学内のどこで取材したのかは分からない。



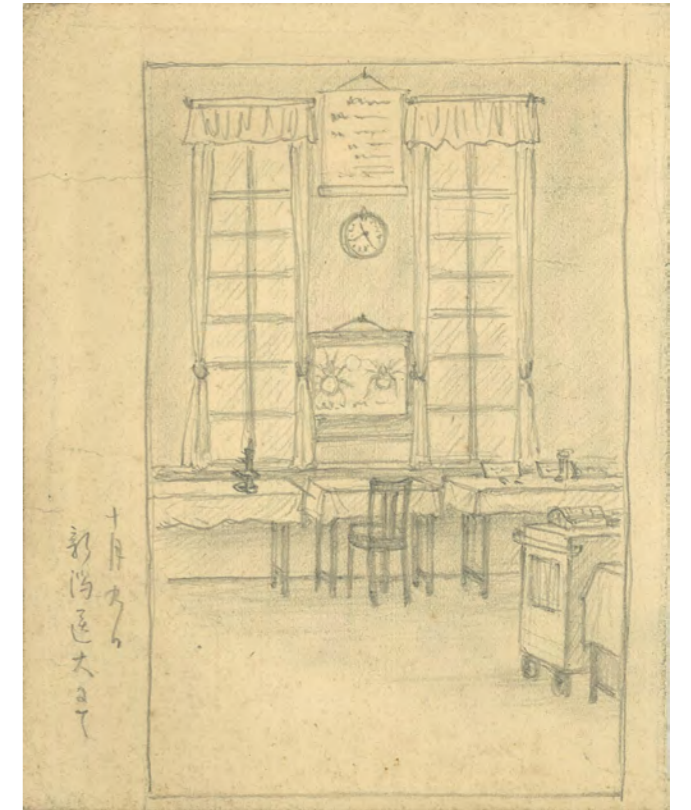
右【素描5】各図右に「侍従の衿」「橋本学長」「ワイシャツ／細い縞アリ。」
17.8×25.5 cm 鉛筆、紙 (画帖第10図)



左【素描6】左下に「十月九日／新潟医大尔て」26.5×11.5 cm 鉛筆、紙 (画帖第7図)



右【素描7】左下に「十月九日／新潟医大で」 23.7×19.0 cm 鉛筆、紙 (画帖第6図)



左【素描8】左下に「新潟医科大学で」 28.0×18.0 cm 鉛筆、紙 (画帖第8図)

【素描7】「十月九日／新潟医大で」

行幸二日目、新潟医科大学の陳列室内部が詳しく描かれている。中央の時計は八時二十五分を指している。

天皇はこの日、宿泊先の知事公舎を出て同大学に午前八時五分に着き、同三十分に発つまで約二十五分間滞在した。先ず休憩室で橋本学長より沿革の奏上があり、次いで陳列室で説明を聞き、教授陣に熱心に質問を重ねたという。時計の針が示す八時二十五分は、学内に天皇がいる時刻であるが、本図は無人の光景を描いている。

また、本図は画面の外枠となるような線で囲われている。廊下からドア越しに室内を描いているように見える一方、画面の外枠を定めるのは、出版物での掲載サイズを意識したためとも考えられる。このように枠線で囲われたものは本図のほかにもう一葉【素描20】ある。

【素描8】「新潟医科大学で」

新潟医科大学の陳列室に並んだ顕微鏡や貼られたグラフの折れ線、配線コード等をつぶさに描き込んでいる。前葉【素描7】同様、天皇の見たもの（天皇に見せたもの）のみを描いているのは、後に何らかの作品を仕上げたためだったろうか。短い時間に陳列室内の素描を二枚、詳細に描いており、天皇の退出後に部屋に戻った可能性も考えられる。



【素描9】左下に「十月九日（玄関で）／新潟医大より御帰り。」 26.5×18.3 cm 鉛筆、紙 (画帖第9図)

【素描9】「十月九日（玄関で）／新潟医大より御帰り。」

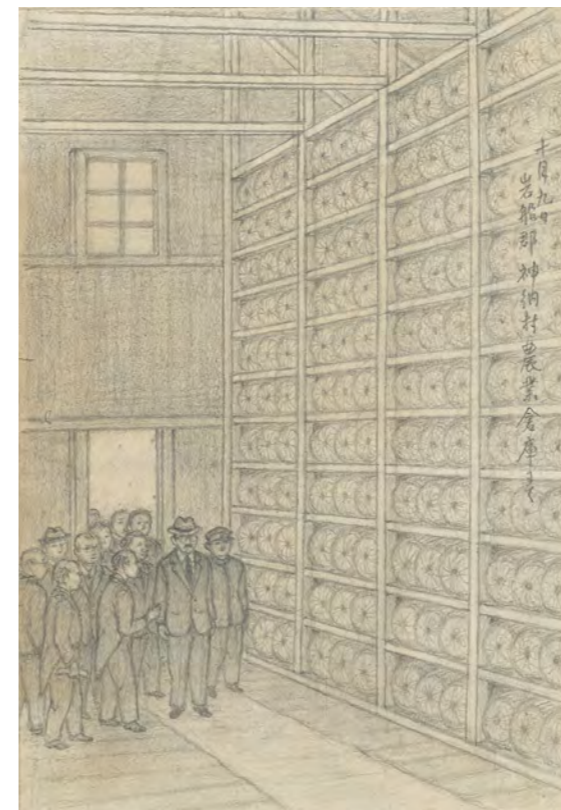
行幸二日目、新潟医科大学の建物内、去り際の天皇が描かれている。「素描6」と異なり、建具や壁などの内装が詳しく描き込まれている。同大学での素描は、ここまでの五枚である。

この後、天皇は新潟市内各所（新潟県水産業会鮮魚集荷所、新潟港、帝石柏崎鉱業所新潟圧縮ガス充填所、新潟交通株式会社、亀田郷栗ノ木排水機場）を車で回り、沿道の新津町民に迎えられて新津駅より列車に乗った。三浦の素描には、これらの視察の様子は残されていない。彼は先行列車で村上へ移動していたのである。



【素描10】右下に「村上行先行列車ルテ／十月九日」18.3×26.5 cm 鉛筆、紙 (画帖第37図)

【素描10】「村上行先行列車ルテ／十月九日」
 行幸二日目、村上行の先行列車内が描かれている。先行列車は御召列車の約二十分前に発着することが告知されていた。御召列車は午前十一時に新津駅発、午前十二時四十分村上駅着である。同乗者らの腕章には「渉外報」道／新潟」「報道／新潟」「報」道係／「■」縣」の文字が見え、報道記者あるいは新潟県の広報関係者と分かる。
 正面には目を閉じた二人、後方には立ちあがる人、左には会話を交わすような人物らが描かれ、混みあった車内の様子が動きのある画面を作っている。



右【素描11】左下に「村上小学校二於ける奉迎式」18.1×26.5 cm 鉛筆、紙 (画帖第14図)



左【素描12】右端に「十月九日／岩船郡神納村農業倉庫ルテ」26.5×18.3 cm 鉛筆、紙 (画帖第16図)

【素描11】「村上小学校二於ける奉迎式」
 行幸二日目、天皇は村上駅から村上町立村上小学校（現・村上市立村上小学校）まで車で移動。校内で鮭など物産品を見た後、校庭に設けられた村上町民奉迎所の壇上に立った。午後一時五分に次の訪問先へと車で出発している。ここから先、天皇は同日の行程を全て車で移動した。
 本図では村上町民奉迎所の会場全体を後方から捉えている。天皇の後ろ姿と、岩船郡の町村より集まった民衆が描かれ、遠景に山、画面中央に御料車、手前に木立が描かれている。三浦は一般の奉迎者とは異なる位置から描いており、他の報道関係者とともに取材していたと思われる。

【素描12】「十月九日／岩船郡神納村農業倉庫ルテ」
 行幸二日目、天皇は岩船郡西神納村（現・村上市）の農業倉庫に午後一時三十五分に着いた。同所には神納村（同）の農業倉庫も隣接しており、それぞれの村長の案内で順に視察。同四十五分に同地を発った。
 高く積まれた米俵の描写が印象的で、また天井の造りまで丁寧に描き込まれている。



【素描13】右下に「加治村／に近づく」13.0×17.8 cm 鉛筆、紙 (画帖第15図)

【素描13】「加治村／に近づく」

行幸二日目、北蒲原郡加治村(現・新発田市)へと向かう途中、沿道に並ぶ人々が描かれている。花束を抱えて微笑む少女や、ねんねこ半纏に幼子を背負う女性の姿もある。本図から、三浦は天皇に先行して加治村に着いていたと分かる。西神納村には羽越本線岩船町駅が、加治村には同線加治駅があり、三浦は村上以降も引き続き列車で移動した可能性が高い。

天皇は神納村および西神納村の農業倉庫から加治村まで約三〇kmの距離を、午後一時四十五分から同三時五分までの一時間二〇分をかけ、車で移動している。記録はないが、おそらく途中休憩が設けられていた。このため、三浦は加治村に先着することができたと推測できる。

【素描14】「おじいさん、おばあさん、ポチも」

前葉【素描13】と同様に、天皇を待つ沿道の人々が描かれている。日時は記されていないが、少なくとも市街地ではないと思われる。行幸二日目と三日目には稲刈の視察が行われている。二日目は曇り時々小雨、三日目は雨具が必要な雨天だった。本図に描かれた人は雨具を携えておらず、また、先が丸くなった鉛筆の先で描いたような描線が前葉と近似しており、同じく二日目の加治村に向かう沿道での素描としたい。

描かれているのは祖父母、父母と子どもたち、家族と思わしき六人と犬である。杖を持ちしゃがむ老人、草の中で背広を着て立つ男性など、それぞれの姿をよく観察している。全員、赤子や犬までが同じ方向を見ている。ここでも三浦の眼差しは、天皇のみならず、迎える人々に向けられていた。



右【素描14】右端に「おじいさん、おばあさん、ポチも」18.1×12.9 cm 鉛筆、紙 (画帖第17図)



左【素描15】左下に「十月九日／稲刈実況の図／加治村上館」18.3×26.5 cm 鉛筆、水彩、紙 (画帖第29図)

【素描15】「十月九日／稲刈実況の図／加治村上館」

行幸二日目、北蒲原郡加治村大字上館(現・新発田市)の農家での稲刈状況視察の様子が描かれている。天皇は加治村に午後三時五分に着き、同二十五分に新発田市(当時)へ車で発った。

記録写真【註7】にも残されているように、テントの下に天皇がいるとみられるが、本図では判別できない。視察の記録というより、青い空と山並みの下に黄金色の田んぼが広がる長閑な風景こそが主題のように感じられる。三浦が本図を描いた位置は視察場所から相当離れており、報道関係者のために用意された場所ではないだろう。【素描12】では天皇と同室内で取材していたが、この場では距離を取っている。訪問先によっては天皇の至近で取材できなかったのかもしれないが、画家の裁量によるところもあったように思われる。三浦にとって、行幸は風景画題でもあったかもしれない。

加治村を発った後、天皇は国立新発田病院(現・新潟県立新発田病院)、新発田市立新発田小学校(現・新発田市立外ヶ輪小学校)の奉迎場、北蒲原郡濁川村(現・新潟市北区)の明治天皇御小休所を歴訪した。これらの訪問先での素描は見当たらない。

【註7】前掲『昭和二十二年新潟県行幸記念誌』頁数なし(40頁と41頁の間)



【素描16】左端に「この侍従は短軀」17.8×25.0 cm 鉛筆、紙 (画帖第12図)

【素描16】「この侍従は短軀」
 いくつかの場面の人物像が組み合わせられている。天皇の像は二個所に認められる。報道関係者と見られるメモを取る腕章の人物と、侍従ら随行者ふたりも描かれている。
 日時と場所は定かでない、五人の人物像すべてが同じ日に描かれた確証もないが、描かれた五人の内、天皇を含む三人が傘を持っている。傘を持った天皇の姿を当時の写真で確認できるのは、三日目の十月十日のみである。

【素描17】
 天皇は車で知事公舎を発ち、午前八時二十七分から同四十七分まで西蒲原郡坂井輪村(現・新潟市西区)にて稲刈を視察している。この素描には沿道の人々が描かれており、天皇は描かれていない。何日ものか書き込みはないが、人々は菅笠を被っており、雨天の行幸三日目、十月十日と考えられる。雨のために菅笠を被った坂井輪村の人々の姿は、記録写真【註8】にも残されている。
 描かれた人々は座ったり、腕を組んだりして、皆が遠方の同じ方向を見ている。行幸を沿道で迎える様子ではなく、離れた所から見ていると考えられる。

【註8】新潟県編『天皇陛下行幸記念写真帖』昭和二十二年、新潟県立図書館蔵、頁数なし



【挿図6】新潟県編『天皇陛下行幸記念写真帖』昭和22年、新潟県立図書館蔵、頁数なし

【素描18】「十月十日、雨／巻縣立／種鶏場ニテ」
 行幸三日目、坂井輪村での稲刈視察の後、昭和天皇は午前九時三十五分に西蒲原郡巻町(現・新潟市西蒲区、西区)の新潟県種鶏場(現・新潟県農業総合研究所畜産研究センター、三条市)に到着し、同五十三分に車で発っている。この時の記録写真【挿図6】に、傘を差す天皇とともに本図と同じ説明板と籠の中の鶏二羽が写っている。行幸二日目の新潟医科大学の陳列室【素描7、8】と同様、天皇の見たもの(天皇に見せたもの)のみを描き、天皇の姿は一緒に描かれていない。この日の三浦の移動手段は分かっておらず、天皇の視察時に同所に間に合ったのかも定かでない。



右【素描17】12.9×18.0 cm 鉛筆、水彩、紙 (画帖第19図)



左【素描18】左下に「十月十日、雨／巻縣立／種鶏場ニテ」18.0×13.0 cm 鉛筆、紙 裏面あり (画帖第18図)



【素描19】左上に「大河津堤防上」13.0×18.0 cm 鉛筆、水彩、紙 (画帖第20図)

【素描19】「大河津堤防上」

行幸三日目、天皇は、午前十時五十分に新信濃川大河津分水堰に着き、地形や可動堰について説明を受け、午前十一時一分に同地を発った。本図は離れた位置から描かれており、人物を特定できない。

天皇はこの後、車で西蒲原郡燕町(現・燕市)に向かい、午前十一時四十分に燕町立燕小学校(現・燕市立燕東小学校)に設けられた物産陳列所、午前十二時五十分に新潟県立三条中学校(現・新潟県立三条高等学校)に設けられた奉迎場を訪れているが、いずれも三浦の素描には描かれていない。その後、天皇は真宗大谷派三三別院にて昼食を摂り、午前十二時五十分に東三条駅で長岡駅行きの列車に乗った。



右【素描20】右下に「三条駅構内へ／お召列車／姿を／あらわす。」13.0×18.0 cm 鉛筆、紙 裏面あり (画帖第36図)



左【素描21】右下に「長岡市／北越製紙屋上より／市内を御展覧中、」26.6×18.1 cm 鉛筆、紙 (画帖第24図)

【素描20】「三条駅構内へ／お召列車／姿を／あらわす。」

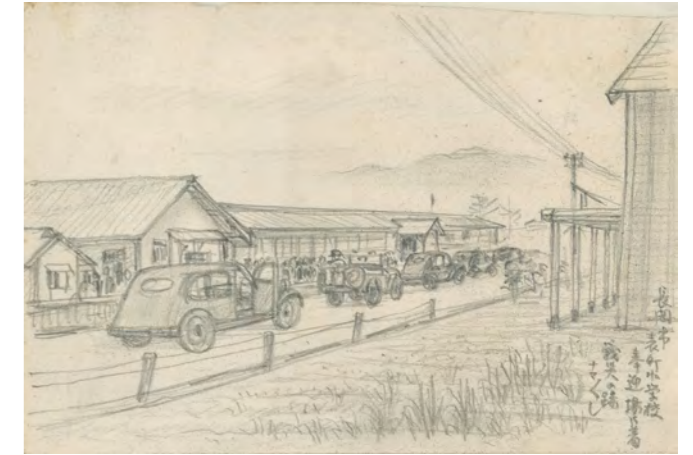
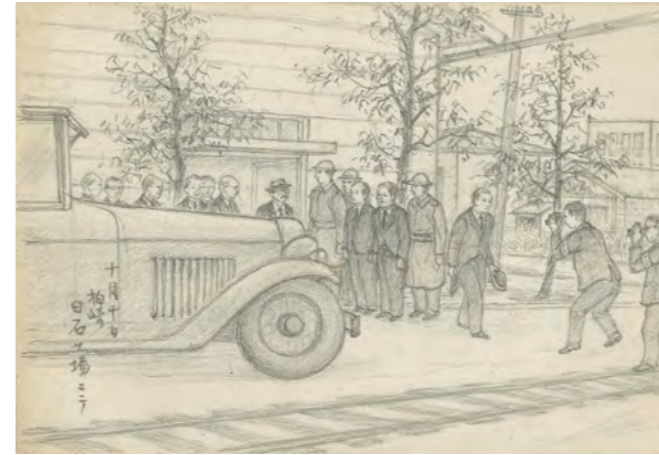
行幸三日目、三条駅に御召列車が入ってくるところが描かれている。この駅で天皇が降りることはなかった。本図の群衆は御召列車だけでも見届けようと待っていたのである。三浦は通過駅の様子までも取材していた。新潟医科大学陳列室【素描7】と同様、描かれた図を枠線が囲んでいる。

【素描21】「長岡市／北越製紙屋上より／市内を御展覧中、」

行幸三日目、列車で長岡駅に到着した天皇は車に乗り換え、午後一時四十二分に北越製紙株式会社に着いた。同社屋上より市内を展望し、昭和二十年(一九四五)八月一日の長岡空襲からの復興状況を視察、物産陳列室で説明を受け、午後一時五十七分に発った。天気は霧雨だったという。三浦は三条駅で御召列車を見送っていたため、天皇より遅れて長岡に着いたはずである。天皇を追って同社に着き、建物の外から本図を描いた。天皇は屋上にいるようだが、むしろ街並みや、沿道に立つ群衆に関心があつたようでもある。

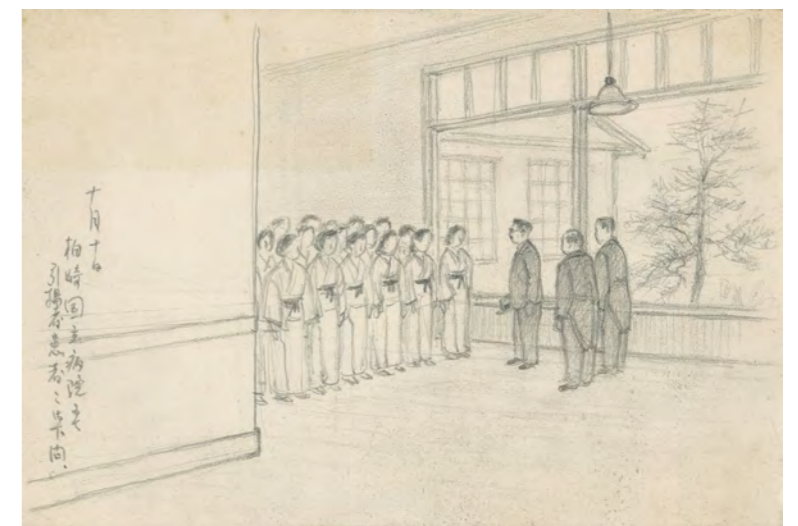
〔素描23〕「十月十日／柏崎／日石工場ニテ」
 行幸三日目、午後三時十分に御召列車は長岡駅を柏崎へ向けて発った。午後四時二十三分に日本石油株式会社柏崎製油所に着いた天皇は、同四時四十分まで視察。三浦が建物内で取材した素描は残されていない。本図には、出入口付近の外観、車に向かう天皇、報道関係者らが描かれている。天皇が乗車するまでは短時間のことだが、背景の木々や建物、人々の衣服など、かなり詳細に描き込まれている。天皇が姿を現す前後も本図を描いていたのだろうか。
 この後、天皇は柏崎市民奉迎場にあてられた柏崎市立柏崎小学校にて市民から迎えられたが、三浦の素描にはその場面もない。

〔素描22〕「長岡市／表町小学校／奉迎場御着／戦災の跡／ナマ／し」
 行幸三日目、北越製紙株式会社への訪問先である長岡市立表町小学校、停車中の行幸車列が描かれている。校舎の前には大勢の人がいる。この表町小学校には、長岡市民奉迎場が設けられた。この素描にも天皇の姿はない。
 天皇は、校内で児童の作品を見た後、運動場にて市民の歓迎を受け、午後二時七分から同十七分まで滞在した。その後、一度市街地を離れて長岡市郊外にある新潟県農事試験場（現・新潟県農業総合研究所）を視察し、再び車で長岡駅に戻った。その途中、駅まで二〇〇mほど手前で車を降りて徒歩で駅に向かい、戦災中心街で市民の歓迎を受けている。三浦の素描には、これらの様子は記録されていない。



右【素描22】右下に「長岡市／表町小学校／奉迎場御着／戦災の跡／ナマ／し」18.3×26.5 cm 鉛筆、紙（画帖第25図）
 左【素描23】左下に「十月十日／柏崎／日石工場ニテ」18.3×26.5 cm 鉛筆、紙（画帖第21図）

〔素描24〕「十月十日／柏崎国立病院尔て／引揚者患者二御下問。」
 本図には、行幸三日目最後の訪問先である国立新潟療養所（現・国立病院機構新潟病院、柏崎市）が描かれている。天皇は同所内にある複数の施設を訪れ、午後五時十分から同二十七分まで滞在した。天皇はレントゲン室前で引揚の女性患者たちに慰問の言葉をかけたとい、本図はその場面だろう。三日目の素描中では唯一、建物内の天皇を描いている。
 〔素描25〕「柏崎国立病院尔て／十月十日暮色／せまる頃」
 前葉〔素描24〕に続き、行幸三日目の国立新潟療養所の場面が描かれている。出迎えか見送りのために職員や患者が建物の前に並んでいる。三浦はその様子を遠くから捉えている。
 行幸三日目の日程を終え、天皇は宿泊地である刈羽郡高田村（現・柏崎市）の飯塚邸に向かった。翌十一日は休養日で、天皇は飯塚邸およびその周辺で過ごしている。この日の様子も翌日の新聞で写真と共に報道されているが〔註9〕、三浦の素描に同日と思われるものはない。



右【素描24】左下に「十月十日／柏崎国立病院尔て／引揚者患者二御下問。」18.3×26.5 cm 鉛筆、紙（画帖第22図）
 左【素描25】右上に「柏崎国立病院尔て／十月十日暮色／せまる頃」26.5×18.1 cm 鉛筆、紙（画帖第23図）

〔註9〕「山道をご散策」『新潟日報』昭和二十二年十月十二日、第2面



〔素描26〕 右端に「高田駅頭で奉迎の小学生」、左下に「十月十二日／午前十時二十分」
13.0×18.0 cm 鉛筆、水彩、紙 (画帖第30図)

〔素描26〕「高田駅頭で奉迎の小学生／十月十二日／午前十時二十分」
新潟県行幸最終日である五日目、天皇は信越化学工業直江津工場、直江津町民奉迎場、高田市南新町共同住宅、高田市民奉迎場（いずれも現・上越市）の各所を訪れているが、三浦の素描は確認できない。本図はこの日の最初に描かれた一枚で、新潟県行幸最後の訪問先である高田駅で取材している。天皇は午前十時三十五分過ぎに同駅に着き、ホームから付近までを埋め尽くす見送りの人々に会釈し、駅待合室の左側に並んでいた報道関係者には労いの言葉をかけたという。その中に三浦がいたのかは定かでない。同四十五分に御召列車は長野県へ発った。

画中に記された午前十時二十分、天皇はまだ高田市民奉迎場へ移動中だった。三浦は奉迎場へは随行せず、駅頭で天皇を待つ市民らを描いていた。描かれた小学生らは、期待を滲ませ、はにかんでいるようにも見える。丁寧に彩色が施され、全葉を通して最も表情豊かに描かれた一枚と言える。



右〔素描27〕 左下に「関山辺より妙高山を望む」 13.3×20.6 cm 鉛筆、紙 (画帖第26図)
左〔素描28〕 右下に「十月十二日／田口駅／戦災／引揚家族」 17.8×12.9 cm 鉛筆、水彩、紙 (画帖第27図)

〔素描27〕「関山辺より妙高山を望む」
関山駅（現・妙高市）は、高田駅から長野に向かう途中、次の〔素描28〕で描かれた田口駅の手前にある。本図では、その付近から妙高山を描いている。おそらく十月十二日、三浦が田口駅までの間に車窓から見た景色と思われる。

妙高山は越後富士とも呼ばれ、多くの画家によって描かれてきた。天皇が新潟で見た風景として記録したのかもしれない。

〔素描28〕「十月十二日／田口駅／戦災／引揚家族」
行幸五日目、田口駅（現・えちごトキめき鉄道・しなの鉄道妙高高原駅）に集まる群衆が描かれている。田口駅は現在の妙高市内、長野県との県境付近である。新潟県の記録にも、新聞紙上で連載された「きょうのご予定」においても、「高田駅発長野県へ」（註10）と記載があるのみで、田口駅は言及されていない。

〔註10〕「きょうのご予定」『新潟日報』昭和二十二年十月十二日、第2面



右【素描29】左下に「田口駅頭／の奉迎者」18.1×13.0 cm 鉛筆、水彩、紙（画帖第28図）
左【素描30】右上に「十二日午後／長野駅頭／て」18.0×13.0 cm 鉛筆、紙（画帖第34図）

【素描29】「田口駅頭／の奉迎者」
前葉【素描28】に続き、行幸五日目の田口駅での奉迎者が描かれている。高齢者にあてられた場所のようである。行幸初日の新潟市民奉迎場の高齢者と異なり、全員立っている。この日は快晴で日差しが強かったためか、顔を覆う人もいる。

【素描30】「十二日午後／長野駅頭／て」
十月十二日の午後、新潟行幸の日程で数えると五日目、長野行幸の初日、長野駅で天皇を待つ人々を描いたものである。奥の子どもたちはしゃがみ込んでいて、到着まで時間があるように思われる。法華経の幟を立て、団扇太鼓を打つ頭巾の人物も描かれている。ここでも三浦は同日の高田駅、田口駅での素描と同様に、奉迎の人々のみを描いている。三浦は天皇のみならず、奉迎の民衆を取材することにも意欲を持っていた。



右【素描31】左下に「十月十二日／富士通信上田工場」21.0×14.7 cm 鉛筆、紙 裏面あり（画帖第32図）
左【素描32】右下に「富士通信／上田工場」14.7×21.0 cm 鉛筆、紙 裏面あり（画帖第31図）

【素描31】「十月十二日／富士通信上田工場」
十月十二日、天皇が長野県の富士通信上田工場を訪れた場面が描かれている。新潟県内だけでなく、長野県でも視察先に同行していたことが本図から分かる。同日の素描中、初めて天皇が登場する。その姿は端に見切れ、機材を操作する女性が中心になっている。機材の描写も詳細である。

【素描32】「富士通信／上田工場」
前葉【素描31】に続き、富士通信上田工場を視察する天皇が描かれている。建具や調度、陳列品を子細に観察している。一方で、案内する人も随行者の姿もなく、あえて省略したと考えられる。行幸供奉員だけで八十四名が名簿に名を連ねており、室内に天皇ひとりのみでいたとは考えにくい。



【素描33】右下に「黒姫／ホテルより」13.1×20.5 cm 鉛筆、水彩、紙 (画帖第33図)



【素描34】左下に「十月十四日／俳諧寺」21.0×29.5 cm 鉛筆、水彩、紙 (画帖第38図)



【素描35】中央図の右に「侍従の方々」、左図の右に「岡田知事」17.8×25.0 cm 鉛筆、紙 (画帖第11図)

【素描33】「黒姫／ホテルより」

車窓からではなく、三浦が滞在した客室から見た黒姫山の景色である。黒姫駅は、前述の田口駅から長野方面に南下したところに位置する。奉迎の人々を取材した十二日に三浦は同地を通過したはずだが、「素描34」から遅くとも十四日には黒姫に戻っていたことが分かる。十二日も長野での取材の後、黒姫に宿をとっていたかもしれない。なお、十二日の天皇の宿泊先は、善光寺大勸進であった。

【素描34】「十月十四日／俳諧寺」

俳諧寺は黒姫駅に近い。建物の造りや周囲の木立が丁寧に描かれ、水彩で彩色されている。日付から、十月十四日に描かれたものと分かる。十二日の富士通信上田工場以降、長野行幸の場面は残されていない。

【素描35】「侍従の方々／岡田知事」

以降の四枚の素描は、日時と場所が定かでないものである。本図では、画面右の二人と左の二人、それぞれの視点で描いた人物像が組み合わさっている。左には天皇と燕尾服姿の岡田正平新潟県知事が描かれている。岡田知事は新潟県行幸の全日程に随行しており、どの場面かを特定するのは難しい。

このように天皇を含む人物像のみを描き、その背景や周囲を描かない素描は他に三枚「素描5、6、16」ある。



【素描36】 図の右に「御挨拶」 17.8×25.0 cm 鉛筆、紙 (画帖第13図)

【素描36】「御挨拶」

いずれかの奉迎場での天皇を右後方から描いたものだが、日時は定かでない。見え方に違いがあるものの、前掲の新潟日報の写真〔挿図5〕とほぼ同じ構図であり、紅白テープが巻かれた囲いの形も、行幸初日の十月八日の新潟市民奉迎場と同じである。ただ、同所で三浦は天皇を左横から描いており〔素描4〕、短い時間に天皇の周囲を大きく移動して二枚描くのは現実的ではない。どちらも新潟市民奉迎場を描いたものだとしたら、本図は報道写真を参考にした可能性も考えられる。

【素描37】「陛下のおつきをまつ／遺家族並ニ高齢者達。」

何日目のどの場面か日時を特定できないが、いずれかの奉迎場と思われる。頭に手拭いを載せた人物や、日傘を差す人物、火のついた煙草を持つ人物らが描かれている。晴天のもとで描かれたものと考えられ、行幸初日(十月八日)もしくは五日目(十二日)の取材と思われる。

【素描38】

〔素描10〕と同様に、行幸二日目の村上行の先行列車内を描いたものと思われるが、定かではない。三浦は行幸三日目の長岡・柏崎間と、五日目に先行列車に乗った可能性がある。腕章をして資料に目を落とす報道関係者を、伸びやかに素早い筆致で描いており、三浦の描写力がうかがえる。



右【素描37】 右上に「陛下のおつきをまつ／遺家族並ニ高齢者達。」 25.5×36.6 cm 鉛筆、水彩、紙 裏面あり (画帖第1図)



左【素描38】 27.4×19.9 cm 鉛筆、紙 裏面あり (画帖第35図)

考察

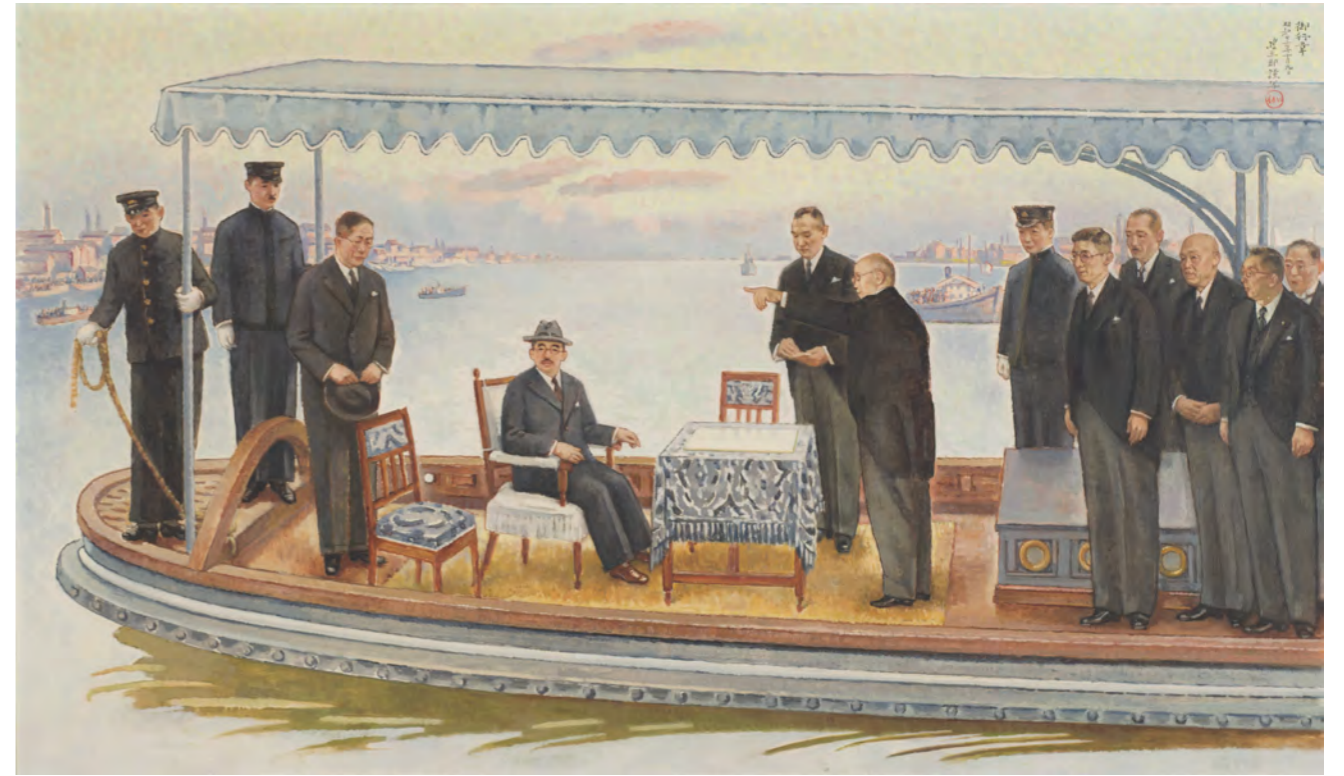
以上の全三十八葉は、描かれた内容から次の四つに大別される。

- (A) 昭和天皇の姿を描いたもの、十三葉
- (B) 奉迎者(報道関係者を含む)のいる光景、十九葉
- (C) 天皇が見たもの(陳列品や車窓風景) 四葉
- (D) 行幸とは直接関係のない風景、二葉〔素描33、34〕

天皇を描いた素描(A)の内、二日目の新潟医科大学〔素描5、6、9〕、同じく二日目の神納村・西神納村の農業倉庫〔素描12〕、三日目の柏崎国立病院〔素描24〕、五日目の富士通信上田工場〔素描31、32〕の七葉では、建物内に同行しており、三浦の取材に特別の許可が与えられていたことが明らかである。

しかし、天皇の姿がないもの(B・D)が二十五葉と、過半を占める点に注意すべきであろう。特に数多いのは、地域の人々の姿(B)だった。更に、天皇の見たもの(天皇に見せたもの)のみを描いた(C)の素描四葉にも着目したい。行幸二日目、新潟医科大学の陳列室〔素描7、8〕、三日目の新潟県立種鶏場〔素描18〕および五日目の車窓から見たと思われる妙高山〔素描27〕の素描がこれにあたる。特に種鶏場では、案内板と鶏二羽が描かれたのみで、そこにいたはずの天皇は描かれていない。三浦の関心は、行幸を迎えるために人々が心を砕いて用意したものへと向けられていた。天皇が訪れた場所、そこで見たもの、迎えた人々の姿が、行幸記録として重要だったものと思われる。

ここで他の画家の例を参照したい。佐藤哲三郎(一八八九―一九五八)の《御行幸》(昭和二十二年、新潟市美術館蔵、新潟商工会議所旧蔵)〔挿図7〕という作品には、行幸二日目に新潟港を船上より視察する天皇の姿が描かれている。随行者たちの相貌を一々正確に描くことに意を用いており、当時の新潟における要路の人々の集団肖像画とも言うべき大作である。また、佐藤は行幸三日目の坂井輪村での桶刈視察も、翌日の新潟日報



【挿図7】佐藤哲三郎《御行幸》昭和22年
油彩、カンバス 116.0×183.0 cm
新潟市美術館蔵、新潟商工会議所旧蔵

の挿画〔挿図8〕〔註11〕に描いている。管見の限り、新潟県行幸の様子を伝えた新聞挿画の希少な例と思われる。行幸に随行した地元画家は、三浦だけではなかったのである。

佐藤は明治二十二年（一八八九）に新潟市（当時）に生まれ、大正元年（一九一〇）に東京美術学校西洋画科を卒業している。官展に入選を重ね、三浦と同じく戦争により郷里に疎開、肖像画家としても定評があった。一方の三浦も早くから中央画壇に評価され、その名は堅実な描写力とともに知られていたに違いない。想像ではあるが、地元の洋画家、日本画家として、それぞれが新潟行幸の随行画家に選任されていたのかもしれない。それは新潟県の奉迎事業を総括した新潟県庁（天皇陛下行幸奉迎準備委員会、委員長は岡田正平知事）の承認に基づく人事であったとも考えられる。

〔註11〕佐藤哲三郎の新聞挿画とほぼ同じ構図の絵画〔挿図9〕が、『今上陛下にご説明申上げる坂井輪村長』という題で新潟市立坂井輪中学校に所蔵されていたことが分かっている（現在は所在不明）。この作品は作者不明とされており、酷似する構図から佐藤哲三郎の作とも考えられるが、なお調査を要する。



【挿図9】作者不詳《今上陛下にご説明申上げる坂井輪村長》
昭和22年頃
（図版出典：新潟市編『新潟市合併町村の歴史 第1巻 西蒲原郡から合併した町村の歴史』昭和25年、口絵）



【挿図8】佐藤哲三郎画「砂丘の村と陛下」
『新潟日報』昭和22年10月11日、第2面

謝辞

本稿執筆にあたり、ご協力くださいました故・三浦文吉氏、板垣桃子氏ならびに板垣雅夫氏のご厚情に深く御礼申し上げます。

主な参考文献

- 新潟県編『天皇陛下行幸記念写真帖』昭和二十二年（一九四七）、新潟県立図書館蔵
- 新潟県編『昭和二十二年新潟県行幸記念誌』昭和二十四年（一九四九）、新潟県立図書館蔵
- 吉田裕『昭和天皇の終戦史』岩波新書、平成四年（一九九二）
- 三浦文治回顧展実行委員会編『三浦文治の世界』光村印刷、平成八年（一九九六）
- 藤原彰、吉田裕、伊藤悟、功刀俊洋『天皇の昭和史 新装版』新日本出版社、平成十九年（二〇〇七）
- 原武史『可視化された帝国 近代日本の行幸啓 増補版』みすず書房、平成二十三年（二〇一一）
- 昭和天皇巡幸編纂委員会編著『昭和天皇巡幸 戦後の復興と共に歩まれた軌跡』創芸社、平成二十四年（二〇一二）
- 前坂俊之編著『昭和天皇巡幸 昭和二十一〜二十九年写真集』河出書房新社、平成二十五年（二〇一三）

（ながしま・あやね 新潟市新津美術館 学芸員）

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第9号（令和4年度）

Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum No.9

発行日／2023年3月31日

発行／新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL:025-223-1622

FAX:025-228-3051

編集／新潟市美術館

印刷／株式会社ウイザップ

ISSN 2187-6770